

磐城高等学校創立 120 周年記念式典 福島県高等学校長協会会長祝辞

平成 28 年 7 月 13 日（水） 9 時
磐城高校南体育館

ただいま御紹介いただきました、福島県高等学校長協会会長を務めております安積高等学校長の久保田範夫でございます。県高等学校長協会 100 名の校長を代表致しまして、お祝いの言葉を申し述べます。

福島県立磐城高等学校の創立 120 周年を心からお祝い申し上げます。

また、本日、感謝状（表彰状）を受賞された皆様に、重ねてお祝い申し上げます。

因みに、いわき地区高校 16 校の中で創立 100 年を超える学校は、磐城高校の他に、磐城桜が丘 112 年、小名浜 109 年、そして平商業 103 年の 4 校だけということになります。

県全体を見ますと、創立 100 年を超える学校は、高校は 26 校、特別支援学校は、盲学校と聾学校の 2 校ありますが、最も長い歴史を持つ安積高校が 132 年、次いで会津高校の 126 年、そして磐城高校が福島明成高校（旧福島農蚕高校）とともに 120 年と続きます。

さて、私の経験で恐縮ですが、**新採用の雪が 3 メートルも積もる只見高校時代から現在まで**新たに赴任した学校では、まず校歌を覚えて歌えるように心がけてきました。それは、**校歌の歌詞にはその学校の創立以来の校訓や精神、スピリッツが込められていることが多いから**でありますし、また、校歌を声高らかに歌うことによってその学校と生徒を好きになれるからであります。

磐城高校の校歌は、第 2 代校長であった西村岸太郎氏の**作詞（渡辺貞雄作曲）**で明治 44（1911）年に定められたと聞いています。校長先生の作詞ですから、自分の学校に対する思い入れが強かったのではないかと思います。少し横道にそれますが、平成 21 年、棚倉町内にあった棚倉高校と東白川農商高校が統合され「修明高校」が誕生しましたが、その校歌は、当時棚倉高校の校長を務めていた私が作詞しました。新生高校に期待する校長としての思いを、新しい校歌に強く反映させたことを今でも覚えています。（久慈川沿いに広がる棚倉町の豊かな自然のもと、棚倉、東白川農商両校の歴史と伝統を継承しつつ、学びの苑・修明高校の生徒たちが、自らを律しながら共に学び、共に夢をつかみ、新たな伝統を築いて新世紀に飛翔してほしい、という願いを込めて詞を練り上げた。）

さて、改めて磐城高校の校歌を見てみましょう。二番の「**自覚の眼^{まなこ} 生くるとき** つとめ励みて 我等^{たゆ}撓まじ」という歌詞は、昭和 28 年に定められ、現在も

「校是」とされている「知性と責任」そのものではないでしょうか。この歌詞からは、知的な自覚を持つ澄みきった瞳を輝かせて、日々努め励んでいる磐城高校の生徒の皆さんの姿が浮かんできます。

ところで、周年行事の際に「学生歌」や「青春歌」が作られることはよくありますが、磐城高校は創立60周年記念として、昭和30年「生徒会歌」を制定、他にあまり例を見ないと思います。その冒頭の歌詞を見ると、「一 英気溢るる高月の 理想の丘に風薫る 誉れの塔を築きつつ 誉れの塔を築きつつ」とありますが、ここにも「知性を深く磨き、高遠な理想のもと」、自分自身と母校を高めようとする磐城高校の生徒の皆さんの、誇らしげで凜とした姿が浮かび上がってきます。

私は、この歌詞を最初に見た時、特に「誉れの塔を築きつつ」を見て、近代短歌を切り拓いた浪漫派の歌人と謝野晶子の短歌を思い出しました。

劫初よりつくり営む殿堂に われも黄金の釘一つ打つ

（遠い遠いこの世界の初めから人間は、文化遺産ともいべき文芸・文学という無形の殿堂を営々として築き上げてきたが、自分も釘一本なりと打ち込み、ささやかではあるがその営みに参画したい。それも、ありきたりの鉄の釘ではなく光り輝く黄金の釘を。）

本校創立期の先輩達から、現在の1年生まで繋がる磐城高校に集った皆さんが、営々と築き上げてきた殿堂「誉れの塔」が磐城高校であると思います。磐城という殿堂に集う校長先生を始めとする教職員・生徒の皆さんが、一人ひとり持っている釘をしっかりと打ち込み、この殿堂をより高く、より大きくしてってください。（その釘は、プラチナかも知れないし、或いは鉄や木製のものもあるかも知れませんが、この殿堂のどこかに打ち込む場所が、釘がぴったりと収まる場所が必ずあるはずです。）仮に、在学中にうまく釘を打ち込むことができなかったとしても、生涯に亘って知性を磨き続けることによって、この殿堂をより確固たるものとすることができるはずであります。

明治29（1896）年の学校創立以来、営々と素晴らしい伝統を築きながら、本校の伝統でもあり学校スローガンにもなっている「積極果敢」や「文武両道」の精神は、ただ無自覚に受け継がれるのではなく、明治・大正・昭和、そして平成の各時代背景の下、絶えず自らに問いかけ、生き生きとした自覚の眼によって検証し、新たな伝統を創造してきたものと考えられます。

私たちの生きている時代は、もの凄いスピードで変化を続け、その流れは、ますます早くなっています。（今後10～20年で約半数の仕事が自動化されるとの研究もあり、どうしても人間がやらなくてはならない仕事は減少していくとも言われます。）

高校教育について言えば、近年の国による教育改革の動き、とりわけ大学入試改革と高等学校教育改革に関する動きからは目が離せない状況にあります。現在の中学2年生が、高校2年生になった段階で「高等学校基礎学力テスト（仮称）」が始まり、高校3年生で現在の大学入試センター試験に代わる「大学入学希望者

学力評価テスト（仮称）」を受験することになるスケジュールが想定され、高大接続を含め、高校・大学の教育改革を一体的に進める国の教育改革の流れは、今までになく急ピッチで進んでいます。しかし、私たちは新たな情報をきちんと読み解きながら、必要以上に慌てる必要はありません。例えば、次の学習指導要領のキーワードの一つに「アクティブラーニング」があります。これには3つの視点、即ち「深い学び」「対話的な学び」「主体的な学び」ですが、これらはまさに磐城高校の生徒の皆さんが、不断の授業やSSH事業をとおして日々実践していることに他ならないと考えます。

いずれにせよ、もの凄い早さで流れていく日本のグローバル社会は、人が減り続ける社会でもあります。福島県だけを見ても、わずか十年後の中学校卒業見込み者の数は、現在の約19,000人から5,000人減少して14,000人になると予測される少子高齢社会を私たちは生き抜いていかなければなりません。

現在、本校に在学している生徒諸君は、東日本大震災発生の平成22年度には、それぞれ小学校4年・5年・6年生でした。重苦しく不安な空気が漂う春を小学校で経験し、あれから5年と4か月という歳月が過ぎ去りました。

あの「3・11」の大地震・大津波と、それに続く東京電力福島第一原子力発電所の事故は、多くの日本人の価値観を変える出来事であると当時言われていましたが、果たして私たちの社会は変わるべき方向へ向かっているのでしょうか。福島の子どもたちの多くが、未だに県内外で避難生活を強いられ、復興はまだまだこれからという厳しい現実があります。一方で、福島県で生活を続けていながらも、大震災の記憶が少しずつ薄れていく現実を垣間見る時、「3・11」を決して風化させてはならないとの思いを強くしています。

本校の卒業生は、35,000名を超え、国内外の各界で活躍していると伺っていますが、高遠な理想と深い知性を持った先輩の方々や、地域の皆さんの支えは大きな力になるはずです。そして、何よりも「たゆまず努め励む」皆さんの期待に、十二分に応え得る面倒見のよい先生方が皆さんを導いてくれるはずです。

磐城高校の生徒の皆さん、校歌にうたわれる「自覚の眼^{まなこ} 生くるとき つとめ励みて 我等^{たゆ}撓まじ」そのままに、「誉れの塔」である磐城高校において、現状に満足することなく、自分の夢を見つけ、その夢に向かって、充実した高校生活を送ってください。そして卒業後も、弛まぬ努力によって知性を磨き続けてください。

長くなりましたが、私からのお祝いの言葉といたします。

本日は、創立120周年、誠におめでとうございます。

校歌

(通常は二番まで歌う)

作詞 西村岸太郎 (第2代校長)

作曲 渡辺貞雄

一 峰は秀づ 赤井嶽
水は清し 夏井川
ここ磐陽の 学び舎に
ああ楽し 我等ともがら

二 真鉄^{まかね}や溶けん 夏の日も
膚^{はだえ}や裂けん 冬の日も
自覚^{まなこ}の眼 生くるとき
つとめ励みて 我等撓^{たゆ}まじ

三 鍛へや腕 この山に
すすげや心 この水に
理想の空は 高くとも
北斗はあかし 希望の光

生徒会歌

一 英気溢るる 高月の
理想の丘に 風薫る
誉れの塔を 築きつつ 誉れの塔を 築きつつ
いざ育まん われらわれら
ああわれら磐高の 生徒会